

発明文化論

〈第 85 回〉

丸山 亮

鬼の創造

先ごろの長野県神城断層地震では、青鬼（あおに）地区に、その後の雨による土砂災害を気遣って避難指示が出されたという。地震はまさに鬼のようなものだったろう。そこから遠くない県北部には鬼無里（きなな）という地名もある。当て字かも知れないが、土地の人の意識の中に、鬼が潜んでいることはまちがいない。あいつは鬼だと言ったり、鬼ごっこが子供の遊びの中にあるのは、現代でも鬼をやっかい払いできていない証拠だ。昨年 10 月には三重県の鬼ヶ城で、全国鬼サミットまで開かれている。

国立能楽堂の平成 26 年 11 月公演は、月間特集が「鬼の世界」だった。初日、舞台に立った歌人で鬼の研究者、馬場あき子が鬼の意味づけとして、死者が異界から親族を訪れるものとの説があることを紹介していた。祖霊の訪問には、子孫を災厄から守ったり、戒めたりという意味があったろう。また、現代の鬼の代表は戦争だとも語っていた。能や狂言では、鬼の民間伝承がさまざまに取り込まれ、舞台をにぎわしている。

この日の狂言「節分」でも、当然鬼が出てくる。節分の豆まきは、疫病退散の宮中行事が民間の習俗に入り込んだものといい、狂言では蓬萊の島からやってきた鬼が女に一目ぼれし、小唄を歌って気を引こうとする道化役を演じている。

続く能の「鉄輪」（かなわ）は、新しく妻を迎えた夫に捨てられた女が、その恨みを晴らそうと、貴船神社へ丑の刻参りをして祈願する怖い話だ。ここでは女が復讐の鬼となり、その面が怨霊を印象づける。男に捨てられた女の情念と復讐を描く平家物語の「剣巻」（つるぎのまき）が下敷きになっているという。源氏物語に由来する能の「葵上」（あおいのうえ）も、女の怨霊が鬼となる。葵祭の行列見物で車争いを起こし、葵上の従者に辱めを受けた六条御息所は、悪鬼となって葵上に復讐を凶る。また「大江山」は、御伽草子の酒吞童子を鬼とみて源頼光が退治する話を能に仕立てている。けれどもこの鬼は騙されて退治される敗者で、朝敵とされた先住民族の悲哀が投影されているという分析もある。

鬼が日本の文献に表れるのは「出雲国風土記」や「日本書紀」にさかのぼる。「日本書紀」の巻第二十六、斉明紀には「是の夕に、朝倉山の上に、鬼有りて、大笠を着て、喪の儀を臨み視る」とあり、居合わせた人々が皆怪しんだという。

鬼の出てくるのは節分、大晦日や庚申の夜以外に、夜行日という日があり、百鬼夜行日もあった。赤鬼、青鬼やささまざまな妖怪が行列する様は、大鏡や今昔物語などで描写されているほか、絵巻や屏風絵、浮世絵など多くの絵画資料が残されている。ここでの鬼は妖怪の総称ということになる。

秋田県の男鹿地方に伝わる旧正月行事のナマハゲは、角のある面をつけた鬼を体現している。角をはやした鬼の姿は、平安時代の創造といわれる。

鬼は、中国伝来の陰陽五行説をもとに呪術を施した陰陽師が利用する観念でもあった。また、彫刻に見る四天王に踏まれた鬼や、絵画に描かれた地獄の鬼は、仏教的なイメージを伝えている。

朝鮮の民話にはトケピといわれる子鬼が登場する。日本のこぶ取り爺さんの話によく似ているほか、類話はさらに世界的な広がりを見せている。ヨーロッパのワルブルグスの夜に登場する魔女なども、どこかこの鬼に通じるものがある。

結局、日本の鬼は古来からの祖霊信仰に仏教、道教など外来の思想が入り込んで、独自の発展を遂げたものだろう。これまで芸能や文学、美術への影響は見てきたとおりだが、それは形を変えて、今後も存続し続けると思われる。心に闇を抱えた人間存在は、そのどこかに鬼を住まわせるしかないのである。

（まるやま りょう 共生国際特許事務所 弁理士）